

過疎山村に居住する高齢者の適応戦略

野 邊 政 雄

Adaptation Strategies of Elderly People in an Underpopulated Mountain Village

Masao NOBE

ビジネス心理学科, 心理学部,
安田女子大学

要 旨

岡山県鏡野町富地域は中国山地の麓にある山村である。筆者は、2006年から富地域で高齢者を対象にサーベイ調査と聞き取り調査を実施してきた。富地域には商業施設や生活関連施設がきわめて少ないから、暮らすのは不便である。にもかかわらず、多くの高齢者が富地域に居住していた。富地域での調査で、筆者は高齢者が富地域に住み続ける理由を明らかにし、高齢者がそこに住み続けられる仕組みを解明しようとした。筆者はそのデータを分析し、いくつもの論文をこれまでに執筆してきた。本稿では、それらの論文の知見を引用しながら、筆者が富地域の研究で全体として何を解明したかをまとめ、紹介する。そして、高齢者が山村に住み続けられるようにする有力な適応戦略の1つが、「近距離別居」であることを指摘する。つまり、子ども（夫婦）と高齢者が同居していなくとも、高齢者の近くに別居子（夫婦）がたいてい居住しているから、高齢者はそうした近親者からソーシャル・サポートを入手しやすい。そうしたサポートのおかげで、高齢者は山村に住み続けることができるのである。

キーワード：山村、高齢者、近距離別居、パーソナル・ネットワーク、人口移動

1. 緒 言

鏡野町富地域は、岡山県の北部にあり、苫田郡の西端に位置する。富地域は東西約11.5キロ、南北約11キロあり、面積は76.13平方キロである。富地域の周辺には地方中核都市はない。1889年の市制町村制によって行政村としての富村は成立したが、2005年3月に周辺の町村と合併し、鏡野町の一部となった。2005年現在、富地域の人口は778人、世帯数は288戸である。65歳以上の高齢人口の割合は38.8%である（国勢調査による）。

筆者は、2006年から富地域で高齢者を対象にサーベイ調査と聞き取り調査を実施した。後述するように、富地域では商業施設や生活関連施設がきわめて少ないから、暮らすのは不便である。にもかかわらず、多くの高齢者が富地域に居住していた。国勢調査によれば、2005年の富地域の高齢化率は38.9%であった、ちなみに、富地域が富地域という地方自治体であったとき、富村は

岡山県内で最も高齢化率が高い地方自治体の一つであった。富地域で調査を実施する目的は、高齢者が富地域に住み続ける理由を明らかにし、高齢者がそこに住み続けられる仕組みを解明することであった。筆者はこれまでにそのテーマで論文を執筆し、発表してきた。本稿の目的は、それらの論文の知見を引用しながら、筆者が富地域の研究で全体として何を明らかにしたかをまとめ、紹介することである。

ちなみに、サーベイ調査は次のようなものであった。住民基本台帳によれば、2006年1月現在65歳以上80歳未満の女性は富地域に125人いたが、その高齢女性すべてを調査することにした。2006年2月に調査員が該当する高齢女性を訪問し、面接調査をした。有効票数は104であり、無効票数は21であった。本稿では、このサーベイ調査を「富地域高齢女性調査」と呼ぶ。

2. 高齢女性が山村に住み続ける理由

2006年当時、富地域の中心である宮原には、鏡野町富振興センター（鏡野町役場の富支所）、富総合福祉センター、小学校、中学校、診療所、郵便局、農協の事務所、商店、酒店、農協の店舗、ガソリンスタンドがあった。富地域の宮原以外のところには、そうした商業施設や生活関連施設はまったくない。バスだけが富地域とその外とを結ぶ公共交通機関である。2006年当時、富振興センターと津山駅の間に1往復、富振興センターと勝山駅の間に1往復、大倉（富地域の西にある集落）と勝山駅との間に1往復、バスの便が1日にあるだけであった。富地域と外とを結ぶバスの外に、富地域内を走るバスもある。鏡野町役場は富振興センターと富地域内の集落を結ぶ福祉バスを週に2回運行していた。このように、富地域ではバスの便数が少ない。富地域には商業施設や生活関連施設が少ないから、高齢者にとって、富地域の生活環境はよくない。

先行研究によれば、場所への愛着から、高齢者は過疎化した地方の農山村に住み続けていることが明らかになっている。これは、次のようなことである。住み慣れていたたり、親密な人間関係があったり、過去の出来事の記憶がその場所にあることから、高齢者は場所への愛着を持つ。そして、その愛着のために、高齢者はその場所に住み続けようとするという¹⁾²⁾³⁾。

富地域での聞き取り調査によれば、住み慣れていたたり、親密な人間関係を保有していたりすることから、高齢女性は場所に愛着を持ち、その愛着から山村に住み続けようとしていた。このことは、先行研究の通りであった。しかし、過去の出来事の記憶がその場所にあることから、高齢者が場所への愛着を持つということは、高齢女性の語りから読み取ることができなかった。富地域の聞き取り調査では、先行研究で指摘されていない、場所への愛着以外の理由もあった。まず、家屋、田畑、墓といった家産がその場所にあり、家産を守るためである。次に、富地域にいれば農作業ができ、生きがいを持てることである。最後に、子ども夫婦への気兼ねから、都会に移り住み、子ども夫婦と同居することをためらっていることである。これらの理由からも、多くの高齢女性が富地域に居住していた⁴⁾。

3. 高齢女性が住み続けられる仕組み

高齢女性が生活環境のよくない過疎山村に住み続けようとしても、必ずしも住み続けられるわけではない。そこには、高齢女性が過疎山村に住み続けることができる仕組みがあるはずである。筆者は、一連の調査でその仕組みを探究した。

高齢者が日常生活をおくる上で必須の事柄は、買い物である。宮原にある商店は食料品や日用品を販売している。また、移動スーパーはそれぞれの集落をまわり、食料品を販売している。そこで、高齢者は食料品や日用品であれば宮原の商店や移動スーパーで購入できる。しかし、食料品と日用品以外の商品は富地域内で購入できないから、そうした商品を購入するためには富地域の外に出かけて行かねばならない。商店や移動スーパーで購入できるといっても、宮原の商店にある食料品や日用品は品目が限られており、移動スーパーが販売する食料品も品目がとても少ない。そこで、さまざまな品目の中から選ぶには、食料品や日用品も富地域の外に行って購入することになる。いずれにせよ、宮原にある商店や移動スーパーだけで買い物がすむわけではない。ときには、高齢者自らが富地域の外に買い物に出かけたり、誰かに代わりに買い物をしてもらったりすることが必要である。

高齢者はたいてい体のどこかが悪く、定期的に病院や診療所に通院している。宮原にある診療所では、内科と歯科の医師が常駐しているだけであるので、それ以外の診療科目の医師に診察してもらうためには、富地域の外の病院や診療所に通院しなければならない。

富地域と外とを結ぶバスの便は1日に1往復あるだけであるから、買い物や通院に利用するのはむずかしい。タクシーを利用することができるけれど、高齢者にとってタクシー代は大きな出費である。そこで、富地域で暮らすには、移動手段を確保することが必須である。

自らが自動車を運転する高齢女性もいたが、人数はきわめて少なかった。数値をあげれば、「富地域高齢女性調査」の回答者104人の中で自動車を運転できたのは、11人だけであった。高齢女性が自動車を運転しなくとも、配偶者が自動車を運転することもある。しかし、いつかは健康を害して、自動車を運転しなくなり、高齢女性は他者に送迎を頼まねばならなくなる。あるいは、高齢女性が病気やけがなどで入院するとき、その準備をしたり、手続きを取ってもらったりしなければならない。送迎ほど必須ではないとしても、高齢者は農繁期の農作業なども他者に頼らざるをえない。必要なときに、そうした手段的サポートを入手できるようになっていないと、高齢女性は富地域で住み続けることができないのである。

高齢女性が子ども（夫婦）と同居していれば、同居子（夫婦）から手段的サポートを手軽に入手できるから、あまり支障なく富地域で住み続けられる。しかし、富地域では、子ども（夫婦）と同居していない高齢女性が多い。数値をあげると、「富地域高齢女性調査」の回答者の60.6%は子ども（夫婦）と同居していなかった。そうした高齢女性は、どのように手段的サポートを入手しているのだろうか。

富地域の高齢女性のパーソナル・ネットワークを岡山市の高齢女性のそれと比較した⁵⁾。そうしたところ、富地域の高齢女性は岡山市の高齢女性よりも多くの親族関係と近隣関係を保有しているのに対し、後者は前者よりも多くの友人関係を持っていた。そして、前者は後者よりも大規模なパーソナル・ネットワークを取り結んでいた。このことから、山村の高齢女性は社会的に孤立しているわけではないと判断できる。

高齢女性が豊富な社会関係を保有しているからといって、ソーシャル・サポートを入手できるというわけでは必ずしもない。「富地域高齢女性調査」では、高齢女性がソーシャル・サポートを他者に期待できるかどうかを調査した。子どもと同居する高齢女性は、同居子からサポートを入手しやすいことはいうまでもない。同居子に次いで、別居子は有力なサポート源であった。別居子に手段的サポートを期待できるかどうかに大きな影響を及ぼす要因は別居子との距離であり、子どもが地理的に近くに居住しているほど、高齢女性は手段的サポートを入手できた。ただ

し、別居子との距離は情緒的サポートの入手可能性や交遊をしたかとは必ずしも関連していなかった⁶⁾。

富地域の高齢女性には、たいてい少なくとも1人の子どもが近くにいた。富地域高齢女性調査の結果でそのことを示すことができる。最も近くにいる子どもの居住場所は、同居41人(39.4%)、近隣地域(歩いて15分以内)1人(1.0%)、富地域内3人(2.9%)、20キロ以内の岡山県内32人(30.8%)、20キロ以遠の岡山県内10人(9.6%)、岡山県外14人(13.5%)、子どもはいない3人(2.9%)であった。

約40%の高齢女性は子ども(夫婦)と同居しているが、こうした女性はソーシャル・サポートを手軽に入手できる。別居子は同居家族に次いで有力なサポート源である。そこで、子ども(夫婦)と同居していない高齢女性について、別居子の居住場所を検討する。約60%の高齢女性は子ども(夫婦)と同居していない。最も近くにいる子どもの居住場所が近隣地域、富地域内、あるいは20キロ以内の岡山県内である高齢女性の割合は、34.6%である。このように、高齢女性が子ども(夫婦)と同居していなくとも、別居子が近くにいることが多い。

現代では、自動車が普及し、成人一人に1台があることもめずらしくない。20キロ以内の場所に子どもが居住していれば、高齢女性がサポートを必要とするとき、駆けつけることができる。別居子が近くにいる女性は日常生活でサポートを実際に受けていなくとも、いつでもサポートを別居子から受けられるという安心感を抱くことができる。このことに関して、子ども(夫婦)と別居する高齢女性は次のことを話していた。

夫婦だけで暮らしています。…移動スーパーで買い物をします。(別居する)息子がここに来るときに、いろいろな物を買ってきてくれます。足が悪いので福祉バスで診療所へ行きます。押し車を使ってこの辺りを歩くくらいです。夫は電動自転車に乗れ、自分で買い物ができます。〇〇町(近くの町)に住む息子が土日に車で来て、買い物などに連れて行ってくれます。

(一人暮らしの女性)体は悪くありません。足が少し痛いだけです。買物は移動スーパーを利用しています。行商の人です。2人の娘がいますが、どちらかが一週間に一度来ます。(2人の娘のうち、1人は富地域内の別の場所におり、もう1人は近くの津山市に住んでいる。)娘が車で買物に連れて行ってくれます。

(夫婦のみで暮らす女性)移動スーパーで買ったり、福祉バスで宮原に行って農協の店で買ったりします。万一のときは(別居する)娘に頼めます。娘は、〇〇町(近くの町)と津山市にいます。でも勤めているからなかなか休めません。急用のときだけ頼みます。

このように、高齢女性は近くに住む別居子に定期的に支援してもらったり、支援を必要とするとき別居子に実家へ戻って来てもらったりしていた。

ところで、高齢期に、きょうだい関係が重要になるといわれている。そこで、きょうだい関係も分析した。高齢女性は手段的サポートよりも情緒的サポートをきょうだいに期待できた。しかし、別居子と比べると、きょうだいはサポート源として格段に重要性が低かった⁷⁾。

4. 多くの別居子が近くにいる理由

では、富地域の高齢女性には近くに多くの子どもが居住していたのであろうか。富地域が富村という地方自治体であった2004年までは、富村の人口移動のデータが公表されている。筆者はその時系列データを分析し、別居子が近くに居住している理由を明らかにした⁸⁾。

富村は高度経済成長期に近畿地方との間で人口移動が多く、これに次いで近くの真庭圏（勝山町、落合町、湯原町、久世町、美甘村、新庄村、川上村、八束村、中和村）や津山圏（津山市、加茂町、富村、奥津町、上齋原村、阿波村、鏡野町、中央町、旭町、久米南町、久米町、棚原町）との間で人口移動が多かった。（真庭圏と津山圏の市町村名は、平成の大合併以前の市町村名である。）そして、近畿地方へは大幅な転出超過であった。1973年までの高度経済成長期が終わってから、富村は近隣の真庭圏と津山圏と人口移動で関係が深まり、両圏へかなりの転出超過となった。その後、津山圏との間の関係がだんだんと強くなり、津山圏へかなりの転出超過となった。

高度経済成長期が終わってから、高齢者とその子どもは「近距離別居」という適応戦略を取ってきたと、その結果を解釈できる。高齢者は富地域に住み続けることを切望する。これに対し、富地域では就業機会が少なく、若者向けの商業施設や生活関連施設がきわめて少ないから、高齢者の子どもは富地域から転出したいと考えている。こうした意向の違いが高齢者とその子どもとの間にある。高度経済成長期が終わった頃から、高齢者家族は近距離別居という戦略を採用することによって、意向の違いに折り合いをつけていた。つまり、高齢者は富地域に住み続ける一方で、その成人した子どもが富地域周辺の市や町に移り住んだ。こうすれば、子どもは富地域にいる両親を頻繁に訪問し、ソーシャル・サポートを両親に提供できるからである。この適応戦略を採用できるようになったのは、1970年頃から自家用車が普及し、移動しやすくなったことがあると推論できる。

高度経済成長が終わった1976年頃から「嫁不足」の問題が富地域で発生したが、このことは近距離別居に拍車をかけることになった。女性が農家に嫁ぐと、夫の両親と同居することになるし、家事や育児の外に農作業もおこなわなければならない。若い女性はこうしたことを嫌い、農家に嫁ぐことを敬遠し始めたのである。若い男性は両親と富地域で同居していると、結婚することができなくなった。（ちなみに、1970年代の前半に結婚の適齢期であった男性は、2006年の調査当時、多くが結婚せずに自分の母親と二人暮らしをしていた。）この問題の打開策は、富地域に住む若い男性が結婚するときに、富地域からその周辺の市や町に移り住んでそこで新婚生活を始めることであった。一部の夫婦は子どもの誕生などを契機にして富地域へ戻って、年老いた両親と同居した。

高齢者家族が近距離別居という適応戦略を取り始めたので、富地域の高齢女性には多くの子ども（夫婦）が近くに居住していた。また、たいてい少なくとも1人の子どもが近くにいた。

富地域は地方中都市である津山市に近い。津山市やその周辺の町には工業団地があることもあり就業機会が比較的多いから、富地域に住む高齢女性の子ども（夫婦）は多くが近くに住んでいたり、富地域で高齢女性と同居したりしていたと考えられる。近距離別居をしたり、子ども（夫婦）と同居したりするためには、富地域は地理的に適した場所にあるといえる。

別の見方をすると、津山市に近いことが過疎化や高齢化を引き起こしているともいえる。平成の大合併直前において、富村（富地域）は岡山県内で高齢化率が最も高い地方自治体の1つであ

った。富地域にアクセスしやすいから、子どもが年老いた両親を残して富地域を出て行きやすい。そのために、人口減少や高齢化が進むのである。

富地域が近距離別居や子ども（夫婦）との同居のため地理的に有利な条件を備えているだけでなく、高齢女性自身も近距離別居や同居ができるように策を講じていた。そうした方策の一つが、子どもを教員にすることである。教員は赴任地を選びやすいし、岡山県外で勤務することはまずない。子どもが教員となれば、富地域の近隣で勤務できる。ある高齢女性は、「長男はここを継ぐように学校の先生にしました。先生になれば、この近くで勤められますから」と言っていた。子どもが教員になった理由を話さなかったが、別の2人の高齢女性も子どもが教員であった。

5. 「限界集落」論の再考

大野晃は、高齢化率が50%を超えた集落を「限界集落」と呼び、そこでは冠婚葬祭など社会的共同生活を維持することがむずかしいと論じた⁹⁾。富地域は高齢化率が高く、集落の中には高齢化率が50%を超える集落もある。富地域は津山市に近いから、若者が両親のもとを出て行きやすい。現代では、自動車は成人に1台ずつあることもめずらしくない。若者が津山市やその周辺の町に住めば、富地域の年老いた両親が支援を必要とするとき、両親の家に簡単に戻って来ることができる。富地域が岡山県北の中心都市である津山市に近いことが、高齢化率を高めているのである。大野は高齢者の取り結ぶ社会関係を考慮に入れないで、「限界集落」を論じた。しかし、「限界集落」に住む高齢者は別居子などと社会関係を結び結んでおり、それを利用してさまざまなソーシャル・サポートを入手できた。高齢者の社会関係を考慮に入れると、大野が論ずるほど、富地域では、社会的共同生活の維持がむずかしくなってはいない。

6. 主観的幸福感

富地域の高齢女性は富地域に住み続けようとし、実際に住み続けていた。だからといって、幸福感が高いというわけではなかった。富地域の高齢女性の主観的幸福感を岡山市の高齢女性のそれと比較したところ、前者は後者よりも有意に低かった。これは次のような理由からである。まず、前者は後者よりも収入が低いことである。収入の多寡は幸福感に影響があり、収入が低いほど幸福感が低くなる。次に、前者は後者よりも年齢が高いことである。年齢は幸福感に影響があり、年齢が高いほど幸福感が低くなる傾向がある。加えて、富地域の親族関係や近隣関係にはネガティブ・サポートの性格があることである。これは、次のようなことである。高齢女性が若いときに結婚した際、たいてい夫の家に嫁いだ。そこで、山村では姑や小姑が近所に住んでいることが多い。そうした親族は高齢女性の家庭の事柄に口を出してくるから、高齢女性にとってやっかい者である。しかし、高齢女性は近所に住む夫方のそうした親族とつき合わざるをえない。そのため、富地域の高齢女性がこれらの社会関係を多く取り結んでいるほど、主観的幸福感が低くなる。これらの理由から、富地域の高齢女性は岡山市の高齢女性よりも主観的幸福感が低かったと推論できる¹⁰⁾。

富地域の高齢女性の収入が低く、年齢が高い。こうしたことを変更することはむずかしい。これに対し、富地域の高齢女性の親族関係や近隣関係がネガティブ・サポートの性格があることは、

策を講じることで変更できる可能性がある。また、自らの興味や関心にもとづいて自由に形成する社会関係が友人関係であるが、友人関係が多いほど、高齢者は幸福感が高い。友人関係を取り結びやすくする政策を講ずることで、高齢者の幸福感を高めることができる。いずれにせよ、山村に住み続ける高齢女性の幸福感を高めることは、課題の1つといえよう。

7. ま と め

山村である富地域では、約60%の高齢女性は子ども（夫婦）と同居していなかった。そうした高齢女性は子ども（夫婦）と同居する高齢女性よりもソーシャル・サポートを格段に入手しにくいと考えられる。しかし、子ども（夫婦）と同居していない高齢女性にはたいてい20キロ圏内に少なくとも1人の別居子がいた。そして、そうした別居子は高齢女性を訪問し、ソーシャル・サポートを提供しやすい。子ども（夫婦）と同居していない高齢女性はそうした「近距離別居」という適応戦略を取ることで、別居子から支援を受けやすくして、富地域に住み続けていた。富地域の近くには、津山市という地方中都市がある。比較的多くの雇用機会がそこにはあるから、高齢女性は子ども（夫婦）との「近距離別居」という適応戦略を取りやすかった。さらに、高齢女性自身も子どもを教員にして、子ども（夫婦）が近くの場合に住むことができるようにするなどのくふうをしていた。

引 用 文 献

1. Rowles, Graham D., "Growing Old "Inside": Aging and Attachment to Place in an Appalachian Community." In Datan, Nancy and Lohmann, Nancy (eds.), *Transitions of Aging*, Academic Press, pp.153-70, 1980.
2. Rowles, Graham D., "Between Worlds: A Relocation Dilemma for the Appalachian Elderly," *International Journal of Aging and Human Development*, 17(4), pp.301-14, 1986.
3. 田原裕子・神谷浩夫「公営者の場所への愛着と内側性——岐阜県神岡町の事例——」『人文地理』54(3), pp.209-30, 2002.
4. 野邊政雄「高齢女性が過疎山村に住み続ける理由の一考察：岡山県鏡野町富地域の事例」教育実践学論集（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）17, pp.219-233, 2016.
5. 野邊政雄「過疎山村に住む高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート」『地域社会学会年報』25, pp.61-75, 2013.
6. 野邊政雄「過疎山村に住む高齢女性と別居子の関係：岡山県鏡野町富地域の事例」『教育実践学論集』（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）15, pp.133-143, 2014.
7. 野邊政雄「過疎山村に住む高齢女性のきょうだい関係に影響を及ぼす要因」『老年社会科学』38(1), 45-56, 2016.
8. 野邊政雄「中国地方山村における人口移動の動向：岡山県苫田郡富村の事例」『教育実践学論集』（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）12, pp.181-195, 2011.
9. 大野晃『山村環境社会学序説：現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会, 2005年.
10. 野邊政雄「過疎山村に住む高齢女性の主観的幸福感：岡山県鏡野町富地域の事例」『教育実践学論集』（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）14, pp.123-34, 2013.

[2019. 9. 26 受理]

コントリビューター：山内 廣隆 教授（ビジネス心理学科）

